

# ひでり狐

豊島与志雄

青空文庫



ある夏、大変なひでりがしました。一ひとつき月ばかりの間、雨は一粒も降らず、ぎらぎらした日が照って、川の水はかれ、畑の土はまつ白に乾かわき、水田みずたまで乾いてひわれました。そして田畑の作さくも物はもとより草や木までも、萎しなびて枯かれかかりました。

田舎いなかの人達は心配でたまりませんでした。そのままゆけば、田畑の作物はみなだめになって、秋の収穫は何もなくなります。困ったものだと、空ばかり眺めましたが、雲一つない青空にはいつも、暑い日が照ってるきりでした。

そこで、方々の村では、鎮守ちんじゆの社やしろに集まって雨乞あまごいをしました。御幣ごへいをたくさん立て、いろんなものを供そなえて、雨が降るようにと鎮守の神に祈りました。

そういうことが幾いくにち日か続いたある日、涼しい風が吹きだして、山の向こうからまつ黒な雲が、むくむくとふくれ上がってきました。

「そら雲が出た……まつ黒な大きい雲だ……だんだん空に広がってきた……今日は雨が降るぞ……」そんなことを言い合つて、人々は躍おどり上がらんばかりに喜びました。そのうちにも、雲は次第しだいに空一面に広がって、あたりが薄うすぐら暗くらくなつたかと思うまに、ぎゅーと大粒の雨が降り出しました。そして一度降り出すと、まる

で天の底がぬけたかと思われるくらい、二日の間、大降りおおふに降り  
続きました。

川の水はいっぱいになり、水田にはたつぷり水がたまり、畑の  
土は黒くしめり、作物は生き返ったように伸び上がりました。そ  
のありさまを、雨の後の晴々はればれとした日の光の中に眺めた時、村  
の人々は涙が出るほど喜びました。

「これもみんな鎮守様ちんじゆのお影かげだ」

そう言つて、皆は鎮守やしろの社で御礼の酒さかもり盛をしました。それぞ  
れ出来る限りのごちそうをこしらえ、赤の御飯をたき、金持ちは  
大きな酒樽さかだるまで買つてきて、まず第一に鎮守そな様に供え、それか  
ら、皆で、飲んだり食べたり歌つたりしました。

その酒盛の一日がすむと、皆田畑に出かけて勇ましく働きだしました。

## 二

その村に、徳兵衛とくべえという男がいました。ひとり者で、少し薄馬うすば鹿ばかななまけ者で、家を一軒もつことが出来なくて、村の長者の物置小屋に住まわしてもらっていました。

鎮守の社で雨の御礼の酒盛があつた翌日の朝早く、徳兵衛は長者の言いつけで、肴さかなを入れた籠かごと大きな酒の徳利とくりとをさげて、鎮守ちんじゆに供えそなに行きました。

そして、村はずれの森の中の、鎮守やしろの社の前まで来ますと、びつくりして立ち止まりました。神しんでん殿の前にいろんなごちそうが並んでいますとところに、大きな狐きつねが一匹うずくまっています、ペロペロごちそうを食べています。

「おやあ……太い畜ちくしやう生なまだ」

肴さかなかご籠かごと酒徳利さかどくりとをそこに置いて、げんこつを握り固めながら、社の上に飛び上がりざま、狐に飛びかかっていきました。と、狐はひらりと身をかわして、横つ飛びに森の中へ逃げていて、見えなくなっていました。

徳兵衛はしばらくぼんやりしていましたが、思い出したように、肴と酒とを神殿の前に供えて、それからじつと考えこみました。

「またあいつが戻ってくるかも知れない。ちよつと番をしていてやろう」

そこにかがみこんで待ち受けましたが、狐はもう戻つて来ませんでした。するうちに、うまそうなごちそうや酒の匂においが鼻についてきて、辛しんぽう抱ほうしきれなくなりました。

「狐でさえ食べてるんだから、おれが少し頂ちようだい戴だいしたところで、まさか罰ばちは当たるまい」

そう思つて、ほんの少しのつもりで手を出したのが始まりで、だんだん大だいたん胆たんになつてきて、ごちそうをやたらに食くひ、酒をやたらに飲のみましたので、腹はらはいつぱいになり酒の酔よいは廻まわつて、いい心持ちにうとうと居いねむ眠むつてしまいました。



眼を覚ました時は、もう日が高く昇っていて、じりじりとした暑さになっていました。彼は酔っぱらったぼんやりした頭で考えました。

「ひどい暑さだなあ。こんな中をたんぼに出るのは、とてもかなわない。よい工夫くふうはないかな。……さてよ、せつかく村の人達がそな供えたごちそうや酒を、狐きつねの奴め、食い荒らしに来ていやがったもつたいないことだ。おれがこれから一つ、番人についてやろうかな。そして鎮ちんじゆ守様が召し上がった後を頂ちやうだい戴する分には、何も差し支つかえはなからう。うむ、そうだ。……それにしても、村の人達に見つかつては、具合ぐあいが悪い……」

そこで彼は、方々探し廻つて、結局社しゃ殿でんの床の下を隠れ場所

に選びました。

それから彼は、もう村の中へ戻って行きませんでした。昼間は、社殿の床の下にもぐりこみ、古むしろを敷いた上に、木の切株きりかぶを枕にして、うとうと昼寝をしました。社殿の床は高くて日陰で、涼しい風が吹き込んできて、いい気持ちでした。晩になると、のっそりはい出してきて、神殿の前に供えてあるものを飲み食いしました。退屈たいくつすると、森の中や、少し遠く川の土手どてなんかを、ぶらぶら歩き廻りました。それから夜遅く戻ってきて、蚊かにさされないよう、頭からむしろをかぶって寝ました。朝早く起き出して、またごちそうや酒を頂戴して、いっぱいになった腹と酔っぱらった体とを、床の下のむしろの上に投げ出して、うとうとと昼

寝を続けました。

村の人達は、雨が降ったのを有難ありがたがつて、ごちそうや酒を毎日毎日鎮守様に供えに来ました。徳兵衛一人では食べきれないほど、たくさんの供物くもつがありました。

## 三

長者の家では、徳兵衛が出ていったきり戻って来ませんので、どうしたのかと心配し始めました。それを聞いて村の人達も、やがて心配し始めました。

一日、二日、三日……いくら待っても徳兵衛は姿を見せません

でした。どこへ行つたのか、死んだのか生きてるのか、さっぱりわかりませんでした。

するうちに、徳兵衛らしい姿を見かけたという者が出て来ました。鎮守ちんじゆの森の中をやたらに歩き廻っていた、という者もありますし、川の土手どてをよろよろ歩いていて、という者もありました。けれどどれもみな夜のこと、遠くから見かけたばかりで、はっきり徳兵衛だとはわかりませんでした。その上、近づいて行こうとすると、彼はびっくりしたように逃げていったというのです。

「不思議だなあ」

皆首をひねって考えました。

すると、誰言うとなく、徳兵衛は狐きつねに化ばかされたんだという噂うわさ

が立ち始めました。第一、徳兵衛は狐の好きな着さかなを持って長者の家から出て、それきりいなくなつたし、次には、鎮守様に供そなえたごちそうが毎日毎日食い荒らされているので、近くを狐がうろつき廻つてゐるに違いないし、それからまた、徳兵衛は昼間姿を見せないで、夜になつて森の中や川の土手を歩いているようだし、いろいろ考え合はしてみると、どうしても狐に化かされたと思われるのでした。

さて、徳兵衛が狐きつねに化かされたとすると、そのまま放つてもおけませんでした。狐に化かされた者は、五日も六日もふらふらと歩き続けて、しまいには森の中なんかで行き倒れになつたり、川にはまつて死んだりするようなことになるのです。

「徳兵衛さんが可哀かわいそうだ」

村の人達はそう言つて、いよいよある晩、狐に化かされた徳兵衛を探しに、出かけてみることにになりました。

そこで、村の壮健そうけんな人達が集まつて、二三十人一かたまりになつて出かけました。松明たいまつ、棒、太鼓たいこ、鐘かね、石油缶せきゆかん、そんなものをめいめい持つていきました。そしてそれを、どんだん、がんがん、打ち叩き打ち鳴らし、松明をふりかざし、棒を打ち振りながら、時々大きな声をそろえて呼びました。

「おーい……おーい……徳兵衛さーん……おーい……徳兵衛さーん……」

一同はまず、狐の出そうな、そして徳兵衛の姿が見えたという、

川の土手どての方へやってゆき、それから次に、鎮守ちんじゆの森の方へやってゆきました。

## 四

徳兵衛は、鎮守様にそな供えてある、御馳走を腹いっぱい食べ、酒に酔っぱらって、社しゃ殿でんの床ゆかの下に眠っていましたが、ふと眼を覚ましました。遠くの方に、何だかひどく騒々しい物音がして、それがだんだんこちらへやってくるようなんです。

「何だろう」

眼をこすりこすり起き上がって、床の下からはい出して、森の

端までいって眺めますと、大勢おおぜいの人が松明たいまつをふりかざし、鐘かねや太鼓たいこを打ち鳴らし、「おーい……おーい……」と呼びながら、川の土手どてから、こちらへやって来ます。そして時々、「徳兵衛さーん」と呼んでるようになります。

「おや、おれの名を呼んでるようだが、おれがどうかしたのかな」  
酔っぱらった頭でそんなことを考えながら、彼は自分が今まで何をしていたかも忘れてしまい、騒々しい行列に見とれてしまつて、夢でもみてるような気持ちで、そこにぼんやりつつ立っていました。

するうちに、行列はいよいよ近づいて来まして、すぐ眼の前までやって来ました。すると、まっ先になつてた一人が、松明を高



くさし上げて、こちらをじつとすかし見て、ふいに声を立てました。

「いたいた……徳兵衛さんが……」

一同の者は駆け出しきて、すぐに徳兵衛を取り巻いて、四方から松明の光をさしつけて眺めました。

「しつかりしなさい。さあ、もう大丈夫だ。徳兵衛さん……何をぼんやりしてるんです……狐きつねに化ばかされたりして……」

背中をどんどん叩かれて、徳兵衛は初めて夢からさめたような気がしました。そしてまだ口が利きけないで、眼ばかりぱちぱちやっています。

そのようすがまったく狐に化かされた者のようでした。何しろ

四日の間、着のみ着のまま、湯にもはいらないでいたものですから、顔も着物もまっ黒に汚れてしまっていましたし、社殿しゃでんの床下からはい出してきたばかりで、頭には蜘蛛くもの巣すまでひっかかっっていました。

「おや、酒の匂においがしてるよ」と誰だれかが言いました。

「なるほど、徳兵衛さんは酔よっぱらってる。……化ばかしといて酒を飲のませるたあ、狐きつねも開あけてるな」

一同の者は喜び勇んで、徳兵衛を捕とまえて胴どうあ上げをして、わいしよわいしよと村の方へ運んでいきました。

徳兵衛は皆から宙そらに支さえられながら、今までのことをぼんやり思い出してみました。そして、まったく本当に狐に化まかされたの

じやないかと思いました。思い始めると、どうしてもそれに違いないような気になりました。

「まったくおれは狐に化かされたのかな」

そして彼は、村に帰って皆から何を聞かれても、ちつとも覚えていないと答えました。

「まったく夢のようだ」

いくら考えても、酒を飲んだりごちそうを食べたりしたことだけで、その他のことは夢のようにぼんやりしていました。そしてしまいには、本当に化かされたんだと自分でも思い込んでしまいました。

村の人達はもとよりそれを信じていました。そして徳兵衛には、

「狐に化かされた徳兵衛さん」という長いあだ名がつけました。

ひでりは怖い、

ひでりの後には、

狐がでるよ……。

そんなことを村の子供達は歌いました。

# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ひでり狐

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>